

HO KITA O BATAKE  
穂 北 尾 畑 遺 跡

県道延岡・西都線改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

---

宮崎県教育委員会  
宮崎県西都土木事務所

# 正 誤 表

ページ	行	誤	正
5	上から9	葺石	蓋石
8	下から7	開しすている。	開口している。
14	下から11	もったタイプある。	もつタイプである。

HO KITA O BATAKE  
穂 北 尾 畑 遺 跡

県道延岡・西都線改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

宮崎県教育委員会  
宮崎県西都土木事務所

## 序

本報告書は、昭和56年度、および、58年度に県西都土木事務所の委託を受けて実施した県道延岡・西都線改良工事に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録です。

昭和56年度の一次調査では、円墳1基と横穴墓1基を調査しています。また、昭和58年度の二次調査区では、縄文時代～中世の文化層、および中世の遺構を調査し、成果をあげています。

そこで、本書が学術資料として、また、社会教育や学校教育等に広く活用していただければ幸いです。

尚、本書の刊行にあたり、現地調査から報告書発刊まで御指導いただいた日高正晴西都原古墳研究所長に深甚の謝意を表しますとともに、県西都土木事務所や西都市教育委員会、並びに発掘調査に参加された方々の御協力に対し、衷中より御礼申し上げます。

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船木 哲

## 例 言

1. 本書は、昭和56年度、および58年度に宮崎県西都土木事務所の委託を受けて実施した県道延岡・西都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮崎県教育委員会が調査主体となり、西都市教育委員会の協力を得て実施した。
3. 遺物の復元、実測図作成、トレースは、増田慈子、荒武望恵、荒木慶子、富永優子、清水玲子、竹島典江、野村涼子の協力を頂いた。
4. 本書の執筆、編集は永友良典が当った。
5. 報告書作成にあたっては、日高正晴氏の御指導を受けた。また、文化課職員、埋蔵文化財センター職員、および西都市教育委員会職員の助言を得た。
6. 本報告の方位は磁北である。また、レベルは海拔絶対高である。
7. 穂北尾畑遺跡は、西都市教育委員会が1985年度に実施した遺跡詳細分布調査で確認された大木原遺跡に含まれる。

# 本文目次

第1章 はじめに .....	1
1. 発掘調査に至る経緯 .....	1
2. 調査組織 .....	1
3. 位置と環境 .....	2
第2章 調査の結果 .....	5
1. 尾畑古墳 .....	5
2. 大木原横穴墓 .....	8
3. 2次調査区 .....	10
4. その他の遺物 .....	14
第3章 まとめ .....	17

## 図 面 目 次

第1図	遺跡分布図	3
第2図	尾畑古墳位置図および2次調査区グリッド配置図	4
第3図	尾畑古墳実測図	6
第4図	尾畑古墳土層断面図	7
第5図	尾畑古墳遺物出土状況実測図	9
第6図	尾畑古墳出土遺物実測図	9
第7図	大木原横穴墓実測図	11~12
第8図	2次調査区遺構分布図	13
第9図	2次調査区出土遺物および一括遺物実測図	15
第10図	2次調査区出土石器および一括石器実測図	16

## 図 版 目 次

図版1.	穂北尾畑遺跡遠景（南から） 尾畑古墳全景（西から）	19
図版2.	尾畑古墳発掘状況（南から） 尾畑古墳土層断面（C区）	20
図版3.	尾畑古墳遺物出土状況 尾畑古墳出土遺物	21
図版4.	2次調査区全景（西から） 2次調査区遺物構検出状況	22
図版5.	2次調査区出土遺物および一括遺物	23

## 第1章 はじめに

### 1. 発掘調査に至る経緯

県道延岡・西都線の西都市穂北地区は道路幅1車線の区間が多く、曲折がはげしいうえに、主要地方道であるため交通量も頻繁である。そのため、県では西都市大字穂北字尾畑から同字大木ノ原一帯にかけての約1,160mの区間について道路幅の拡幅工事を計画したが、その事業区内に円墳一基と横穴墓一基および、その周辺に埋蔵文化財包蔵地が存在することから、県文化課、県西都土木事務所、西都市教育委員会の三者で事前協議を行った。その結果、工事計画変更が困難であるため、着工前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとした。調査は、県西都土木事務所の委託をうけ、県文化課が調査主体となり、西都市教育委員会に調査協力を依頼する体制で、昭和56年度と昭和58年度の2ヶ年にわたって実施した。昭和56年度は、県文化課岩永哲夫主任主事、同面高哲郎主事、同永友良典主事の担当で8月10日から9月18日まで円墳（尾畑古墳）1基と横穴墓（大木原横穴墓）1基の発掘調査を実施した。昭和58年度は、日高正晴西都原古墳研究所長と県文化課長津宗重主事の担当で5月9日から5月13日まで尾畑古墳西側の畑（約200㎡）の確認調査を実施したところ、縄文時代～中世の遺物や柱穴遺構を検出したため、6月20日から7月1日にかけて本調査を行った。なお、報告書については諸般の都合により昭和60年度作成をした。

### 2. 調査組織

調査主体 県教育委員会

教育長 後藤賢三郎（昭和56、58年度）、船木 哲（昭和60年度）

文化課長 山本一磨（昭和56年度）、井上哲哉（昭和58年度）、永井初志（昭和60年度）

文化財係長 山下正明（昭和56年度）

主幹兼埋蔵文化財係長 田中 茂（昭和58年、60年度）

（調査員） 岩永哲夫（現 県総合博物館）（昭和56年度）、面高哲郎（昭和56年度）、

永友良典（昭和56年度）、長津宗重（昭和58年度）

調査員及び  
調査指導 日高正晴（現西都原古墳研究所長）

調査協力 西都市教育委員会

教育長 横山人見

社会教育課長補佐 緒方吉信  
兼文化係長



主事(担当) 豊方政幾

事業主体

西都土木事務所

所長 松本陸佳(昭和60年度)

### 3. 位置と環境

穂北尾畑遺跡は、西都市の大字穂北字尾畑から大木原にかけて所在する。一ツ瀬川を西都市街地からさらに上流へ行くと、九州山地の縁辺に形成された杉安峽がある。その手前に、一ツ瀬川とその支流である瀬江川との分岐点の左岸域に南東にのびる標高40~50mの丘陵地がある。遺跡はこの丘陵地の東端に位置する。こり一帯には県指定史跡の上穂北古墳群が分布する。遺跡の西約1kmの畑地に径20m前後の円墳4基が分布する。さらに、西へ約3kmのところ円墳1基が所在する。また、瀬江川をはさんだ東側の台地端は鋸歯状に入りこむ地形となっておりその南斜面も横穴墓26基が5~7基単位で分布する。今回調査の当遺跡に所在する円墳、横穴墓も上穂北古墳群内に含まれる。

古墳の分布はさらに周辺にみられる。上穂北古墳群から南東へ約1kmの一ツ瀬川左岸に面した干畑地区には、横穴式石室を有する干畑古墳が所在する。さらにその周辺の南向きの傾斜地にも横穴數十基が分布する。このように、一ツ瀬川上流左岸域の穂北周辺には、高塚墳と横穴墓が共存する地帯が形成されている。一方、南側対岸の台地上に分布する西都原古墳群(総数329基、うち前方後円墳32基)には地下式横穴墓が分布している。

一ツ瀬川流域には右岸域の西都原古墳群をはじめとして、左岸域には、干畑古墳の東側台地上に茶臼原古墳群(総数54基、うち前方後円墳2基)、さらにその南東の台地上には新田原古墳群(総数210基、うち前方後円墳22基)が分布する。一方、右岸域には、西都原古墳群が分布するほか、三納古墳群、三財古墳群が分布する。

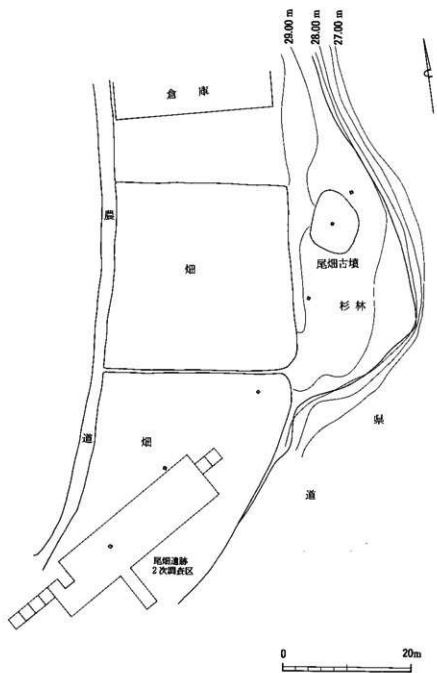
- |                     |                     |                     |                     |
|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 尾畑古墳             | 2. 大木原横穴墓           | 3. 上穂北古墳1~4号(円墳)    | 4. 上穂北古墳5号(円墳)      |
| 5. 上穂北古墳6号~13号(横穴墓) | 6. 上穂北古墳14~20号(横穴墓) | 7. 北穂北古墳21~26号(横穴墓) | 8. 上穂北古墳27~31号(横穴墓) |
| 9. 上穂北古墳32~39号(横穴墓) | 10. 干畑横穴墓群          | 11. 干畑古墳            |                     |



1 : 25,000 表



第1圖 遺跡分布圖



第2図 尾畑古墳位置図および2次調査区グリッド配置図（1/600）

## 第2章 調査の結果

### 1. 尾畑古墳

#### 墳 丘 (第3図)

尾畑古墳は遺跡東端の杉林中にあり、東側はすぐに傾斜面となる。墳丘は周囲を削られており、南北約10m、東西約6m、高さ約2mを測る。特に南東～南西にかけての部分は削平が著しく急傾斜となる。北側はほぼ原形を保つと思われる。

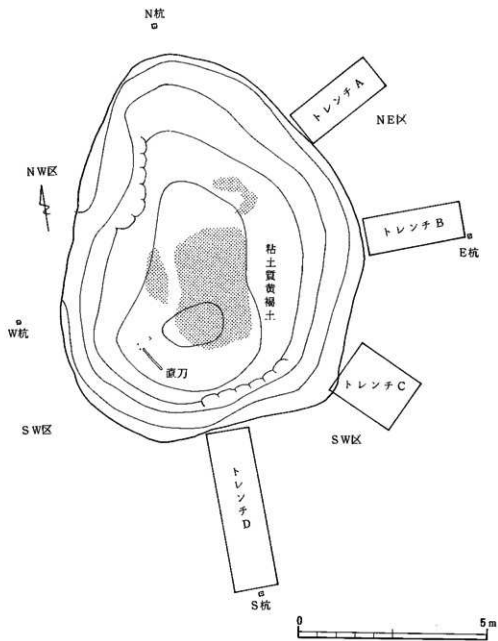
調査はまず磁北で四分割し、四分法で中央部に1m幅のベルトを残しながら掘り進めることにした。四分割した各区はNE、NW、SE、SW区とした。表土削ぎの段階で墳頂から北斜面にかけて部分的に葺石の散布がみられた。墳頂より約1m掘り下げた時点で中心部に南北幅約2.5m、東西幅約1.5mの粘土質の黄褐色土のひろがり認められたが、厚さ5～10cmと薄く明確な掘り込みの検出や遺物の出土はなかった。また、この地点より南西約1mのところまで直刀1本、鉄鏃4本が出土した。さらに、その周辺に平釘3～4本が点在していた。しかし周辺に土色の変化等は確認できなかった。遺物の出土状況(第5図)は、直刀が北西～南東の向きに出土し、その後から鉄鏃が出土した。平釘は直刀の東横から1点、北1mのところから2点出土した。

また、墳丘の東側を中心に裾部から2m～4mのトレンチを入れて墳丘裾や周溝の確認を行ったが検出できなかった。

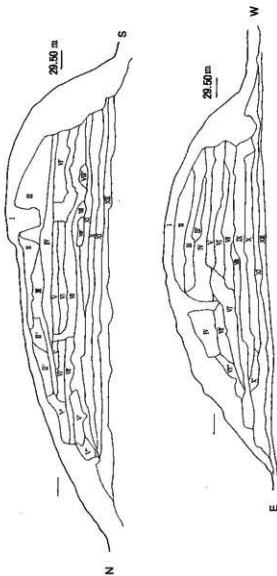
出土遺物としては鉄器類のほかに、葺石中より須恵器片を検出した。また、古墳に伴う遺物ではないが、トレンチ内から陶磁器片を検出したほか、葺石中より石斧等を採集できた。

#### 層 序 (第4図)

墳丘の土層断面を南北ベルトの西壁、および東西ベルトの北壁の状態で観察した。基本的には表土の下に黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土の4層が15cm～20cm幅で相互に堆積している。表土は墳頂付近で20cm程の堆積があるが、墳丘の南側や、西側では、側面がかなり削平されている状況が断面からうかがわれる。表土下を上、中、下層に分けてみると上層(I～IV層)は黒褐色土と褐色土がレンズ状に堆積する。また、樹根痕が深く入り込む。中層からはほぼ平坦な堆積をみせており、中層(V～XIII層)は粘土質の黄褐色土が中央部から北側および西側に堆積する。中層下位には黒褐色土、暗褐色土が堆積する。下層(IX～XI層)は黒褐色土、暗褐色土、褐色土が堆積するが下層は全体的に堅くしまっている。Ⅻ層は地盤である。以下は、黄褐色粘質土、礫層へと続く。



第3図 尾畑古墳実測図 (1/100)



- |      |             |       |             |
|------|-------------|-------|-------------|
| I    | 灰土および樹根痕    | VI    | 暗褐色土        |
| II   | 褐色土         | VII   | (黒味を帯びる)    |
| III  | (黄褐色土・少量泥入) | VIII  | (若干しまっている)  |
| III' | (黄褐色土・多量泥入) | VIII' | (軟質である)     |
| IV   | 黒褐色土        | IX    | 黒褐色土        |
| IV'  | (若干しまっている)  | X     | (粘質を帯びる)    |
| V    | 暗褐色土        | XI    | 暗褐色土        |
| V'   | (粘土質)       | XII   | (かなりしまっている) |
| V''  | (粘質度が低い)    | XIII  | 暗褐色土        |
| V''' | 風化している)     | XIV   | 暗褐色土        |
|      |             | XV    | (粘質を帯びる)    |
|      |             | XVI   | 褐色土         |
|      |             | XVII  | 赤褐色土 (粘質)   |

第4図 尾畑古墳土層断面図 (1/80)

## 遺物

### 直刀(第6図1)

現存長79.4cm、身長74.4cm闊よりで身幅3.0cm、鋒よりでの身幅2.8cm、背幅0.9cmを測る。鞘の木質が両面の闊よりに多少残存する。

### 鉄鏃(第6図2~5)

2~5は騮袂三角形鉄鏃で、いずれも基部以下を欠く。2はほぼ原形を保つ。現存長4.0cm、最大鏃身幅3.5cm、厚味0.5cmを測る。3と4は騮袂を欠く。5は騮袂と先端を欠く。なお、2~5には矢柄の木質が残存する。

### 鉄釘(第6図6~8)

6~8は平釘である。6は全長16.5cm、頭部の幅1.8cm、厚み0.5cmを測り頭部より5.0cmのところ約62°に屈曲する。木質は屈曲部より先に付着し、板目は釘に平行に走る。7は先端部を欠くが、頭部から2.3cmのところ約58°に屈曲する。屈曲部は6よりはゆるやかなカーブを保つ。木質は屈曲部のみ付着しており板目に対して約30°の角度で打たれている。8は先端部のみ残存する。木質は全体に付着しており、釘は板目に對し約50°の角度で打たれている。6、7とも最大幅1.5cm、厚み0.5cmを測る。

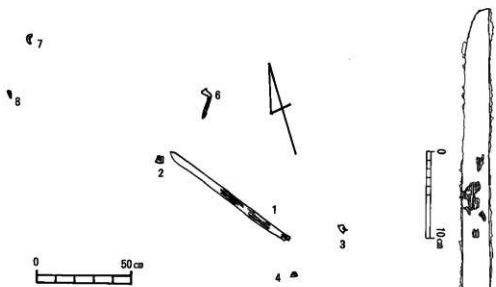
### 須恵器坏身(第6図9)

口径約13.4cm、受部径14.6cm、器高3.8cm、立ち上がり高1.0cmと短かく、立ち上がりがやや内傾し、途中からはほぼ直立気味になり、端部は丸味をもつ。受身と立ち上がりの間に溝をもつ。

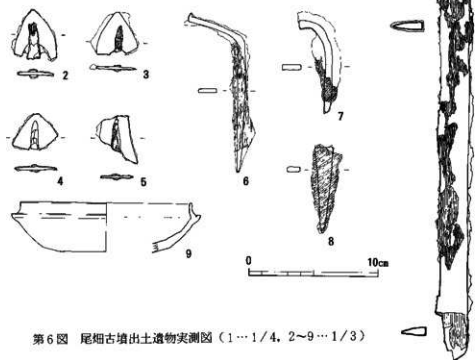
## 2. 大木原横穴墓(第7図)

尾畑古墳から西へ500m行った泉道の切通し面に開している。以前の道路建設時に羨門部付近から削られたらしく、羨道部はわずかに100cm残す状態である。

横穴墓はシルト岩層に掘り込んでいる。玄室部は左壁の幅240cm、右壁の幅260cm、奥壁の幅245cmで、ほぼ正方形のプランを呈している。また、奥壁側に幅60cm~90cm、高さ30cm~40cmの棚状の施設を有する。一方、袖部も左袖部の幅45cm、右袖部の幅60cmと長く、角度もほぼ直角になっており、明瞭な両袖を有する構造となっている。羨道部は玄門側で幅114cm、現存する先端側で幅95cmを測る。天井までの高さは、羨道内や玄室内の天井の剝落の度合が激しく正確ではな



第5图 尾畑古墳遺物出土状況実測図 (1/30)



第6图 尾畑古墳出土遺物実測図 (1...1/4, 2~9...1/3)



いが、玄室内で120cm～130cmを測り、アーチ型の構造と思われる。

玄室内と標状の施設のそれぞれの床面には壁沿いに大きさ10cm～5cm程度の小礫が敷かれている。しかし、戦時中に防空壕等に利用されていたという話もあり、横穴墓の施設の一部かは明確ではない。また、出土品等もみられなかった。

### 3. 2次調査区 (第8図)

2次調査区として、尾畑古墳の西にひろがる畑地の約100㎡を調査した。調査は幅2m、長さ42mのトレンチを西南～東北方向に3ヶ所入れた。畑地耕作により地表下50cm～60cmはすでに削平されていた。調査の結果、縄文土器片、土師器片、陶磁器片および石斧、石鏃等を出土したが、層位的には混在した状態での出土であった。遺物は調査区中央部に集中する。遺構はアカホヤ上面より柱穴、溝状遺構、円形および方形の落ち込みを検出した。柱穴は深さ50cm～60cmのものもあるが、そのほとんどが10cm～20cmと浅い。径は20cm～40cmである。検出された柱穴には規則性は確認できなかった。遺物としては土師器片および、備前系の埴鉢片が2～3ヶ所の柱穴中から出土した。溝状遺構、方形および円形の落ち込みとも深さが5cm～10cmと浅く、遺物は出土しなかった。

### 遺物 (第9図・10図)

#### 縄文土器

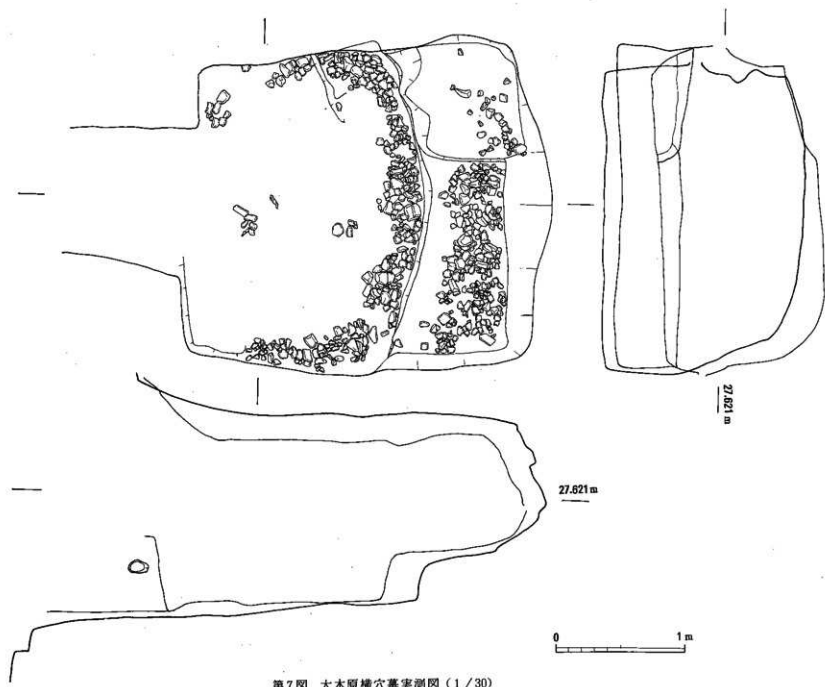
縄文土器としては早期の貝殻条痕文系、後期の御領式系と思われる小破片が2～3点出土している。

#### 土師器 (第9図1～3)

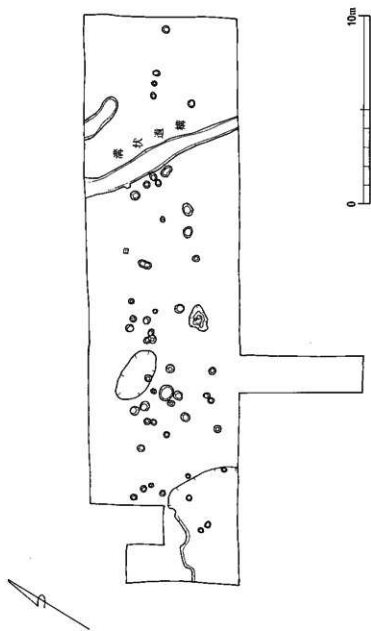
土師器皿と思われる小破片は数十点出土しているが、そのうち、1・2はへら切り底、3は糸切り底の土師器皿の底部片である。

#### 青磁 (第9図4・5)

4、5は、碗の口縁部片で端部が外反する。



第7图 大木原横穴墓实测图 (1/30)



第8図 2次調査区遺構配置図(1/200)

#### 白磁(第9図10)

10は、碗の底部で高台全面無軸である。また、底部内面には施軸後、幅1cmにわたって輪状の削り取りがみられる。高台径4.7cm。

#### 播鉢(第9図16)

口縁部には5本の沈線が施されている。内面には口縁下2.2cmのところから2.4cm幅で10本の条線が1単位として施されている。

#### 石器(第9図1~6)

1、2は、抉りを両脇にもつ扁平打製石斧である。3、4は打欠石錘。6はチャート製の石鏝で三角形式の抉りを持つタイプである。基部を1部欠損。長さ3.0cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。5は打製の方形石庖丁と思われる。右側に抉りが認められる。長さ6.5cm、幅4.0cm、厚さ0.9cm。

#### 4. その他の遺物

##### 青磁(第9図6~8・12・13)

これらの遺物は、尾畑古墳の裾部確認の試掘坑内および葺石中より出土。遺構等は検出していない。6は蓮弁文碗。ヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつタイプある。細線と剣頭とが蓮弁としての単位を意識して施されている。7は稜花皿で口縁端部は反する。8・12・13は碗の底部片。施軸方法には、軸が豊付を越えて高台内面までかかり、外底は無軸のもの(12)、軸が豊付のみにかからないもの(13)、高台~底部にかけて無軸のもの(8)の3タイプがある。

##### 染付(第9図14)

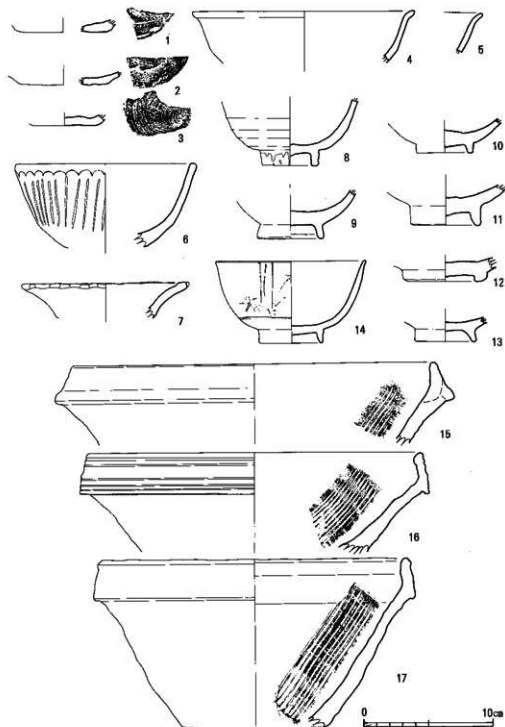
口径11.5cm、底径5.0cm、器高6.4cmの碗で口縁端部が外反する。

##### 播鉢(第9図15・17)

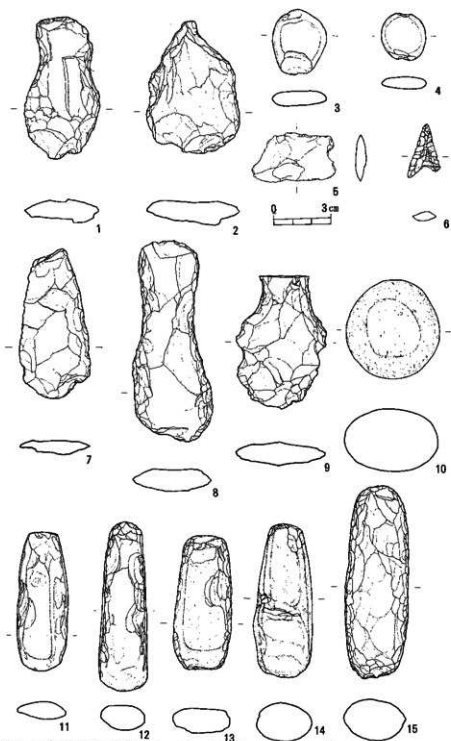
16と同様の備前系の播鉢口縁部片。17は内面には口縁下0.5cmのところから2.7cm幅で7本の条線が1単位として施されている。15・17ともに口縁部に沈線はみられない。

##### 陶器(第9図9・11)

9・11とも底部。色調は黄橙色を呈する。



第9図 2次調査区出土遺物(1~5、10、16)  
および一括遺物(6~9、11~15、17)実測図(1/3)



第10図 2次調査区出土石器(1~6) (1、2、7~15...1/2  
 および一括石器(7~15) 3~6 1/3)

0 10cm

### 石 器 (第10図7~15)

いずれも古墳の葦石中で採集した。7~9は扁平打製石斧、11~15は細味の打製石斧で、10は磨石である。

## 第3章 ま と め

尾畑古墳は周辺に分布する円墳から径14~15mの円墳と思われる。調査の結果、主体部が2ヶ所で確認された。1つは墳丘中央部に粘土質の黄褐色の落ち込みの見られる箇所で、掘り込みの検出や遺物の出土はなかったが、堆積土の状況から粘土層の主体部が想定される。また、そこから南西に約1mのところまで全長70cmを超える直刀や無茎平根三角形式鏃等が出土しており、あわせて鉄釘も数点出土していることから組合せ式の木棺直葬の主体部が想定できる。2つの主体部は、構造、遺物などから、中央の主体部は粘土層を用いている点から5世紀後半と思われる。また、南西側の主体部は、出土遺物や平釘を使用している点などから5世紀末葉から6世紀初頭の時期と思われる。なお、土器類として1点のみ出土した須恵器坏片は小田富士雄氏編年のIVの期に相当し、6世紀末葉に比定できる<sup>(1)</sup>。また、出土状況が葦石下という点からみても、別の要因でもたらされたものと判断したい。

一方、大木原横穴墓は、遺物の出土はなく明確な時期については言及できないが、玄室が正方形プランで明確な両袖を有する点などから6世紀後半~7世紀初頭の横穴墓と思われる。なお、現在上穂北地区には30数基の未指定横穴墓が所在しており、西都市教育委員会では昭和59年度から、その確認調査を実施しており、2~3年後にはその詳細が明らかになるとと思われる。今回調査の大木原横穴墓についてもその段階で時期についても明確になるとと思われる。

古墳時代以外の遺構としては、2次調査区で柱穴群を検出したが、時期、性格については不明な点も多い。时期的には、縄文時代後期と中世の遺物が尾畑古墳周辺の一括資料も含めて比較的出土している。今回の調査区は位置的に台地の東端に所在するため、遺跡の縁辺部と思われる。今回の調査の結果、西にひろがる台地上に縄文時代後期や中世の時期を中心とした遺跡が所在する可能性が把握できた。なお、中世の時期については、青磁蓮弁文碗<sup>(2)</sup>、青磁後花皿<sup>(3)</sup>、備前系の燗鉢<sup>(4)</sup>などの出土遺物から15世紀後半から16世紀前半の時期が中心であると思われる。しかし、へら切りの土師器皿も出土しており、时期的に古い段階までさかのぼる可能性もある。また、周辺には弥生~平安時代にわたる遺物の散布もみられ<sup>(5)</sup>、时期的にさらに広がりを見せる。

注

- (1) 小田富士雄「八女古窯跡群調査報告」I～V 1969～1972  
小田富士雄「九州の須恵器序説」(『九州古考学』第22号) 1964
- (2) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」(『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会) 1982
- (3) 亀井明德「熊本県城南町出土の青磁資料」(『貿易陶磁研究No.1』日本貿易陶磁研究会) 1981
- (4) 間壁忠彦「備前」(『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館) 1977
- (5) 西都市教育委員会が1985年に実施した遺跡詳細分布調査で遺物の散布が確認された。(大木原遺跡)



# 圖 版



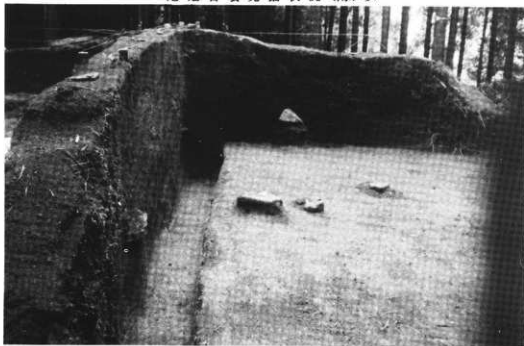
穂北尾畑遺跡遠景（南から）



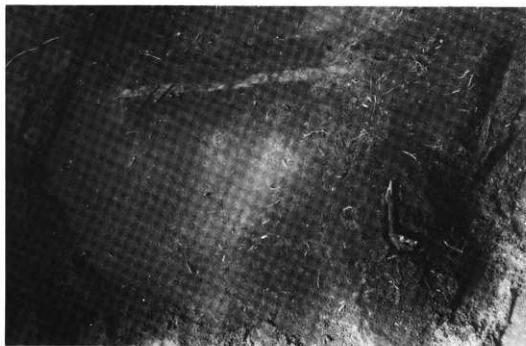
尾畑古墳全景（西から）



尾畑古墳発掘状況(南から)



尾畑古墳土層断面(C区)



尾畑古墳遺物出土状況



直刀



鉄鏃



平釘

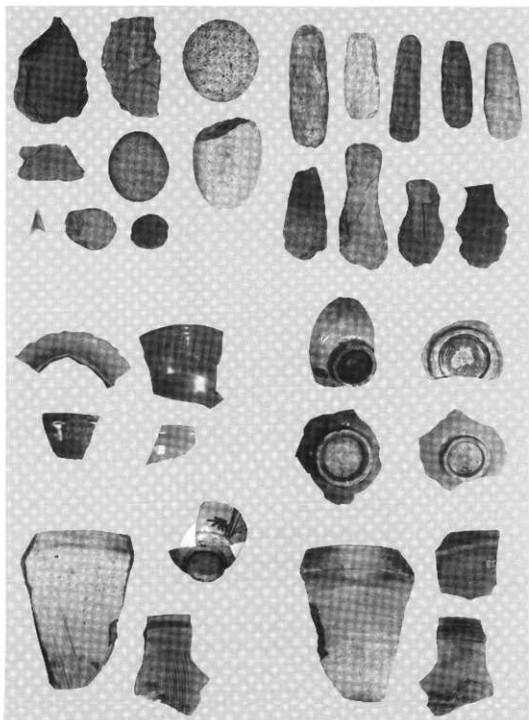
尾畑古墳出土遺物



2次調査区全景(西から)



2次調査区遺構検出状況



2次調査区出土遺物および一括遺物

**穂北尾畑遺跡発掘調査報告書**

県道延岡西都線改良工事に伴  
う埋茂文化財発掘調査報告書

発行年月日 昭和61年3月31日

編 集 宮 崎 県 教 育 委 員 会

発 行 宮 崎 県 西 都 土 木 事 務 所

印 刷 宮 崎 南 印 刷 所